短 報

スポーツ競技者における競技種目と 競技レベル、妬み感情の関連¹

—悪性妬みと良性妬みに着目して—

上野雄己 日本学術振興会（早稲田大学）

陶山 智 日本体育大学体育学部

小塩真司 早稲田大学文学学術院

**The relationships among athletic events, competitive level, and envy:
Focusing on malicious and benign envy**

Yuki Ueno (*Japan Society for the Promotion of Science*)

Satoshi Suyama (*Faculty of Sports Science, Nippon Sport Science University*)

Atsushi Oshio (*Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*)

This study aimed to examine the relationship among athletes' envy, athletic events, and competitive level. A survey was conducted among 496 university athletes (428 men and 68 women). The results indicated that competitive level was positively associated with benign envy in competitive sports (open-skill sports), while no significant association between the two was observed in record sports (closed-skill sports). Moreover, athletic events and competitive level were not significantly associated with malicious envy. Therefore, envy scores differed depending on the athletic events, competitive level, and the combinations thereof.

Key words: malicious envy, benign envy, competitive level, athletic events, athletes

問題と目的

スポーツの世界において、輝かしい功績を収め、圧倒的なパフォーマンスを発揮するアスリートは時には憧れの的となる。しかし、そのような優れたアスリートが身近にいる場合、レギュラーから外され大会に出場することができないことや、対戦相手として勝負する可能性があり、高い競技成績を残すうえで妨害になることが考えられる。尊敬するアスリートやチームメイトであったとしても、自身とライバル（競争相手）

関係である場合にはアンビバレントな感情を抱くことが示唆され（雨宮・上野・清水，2014），そのような状態においてライバルに対し不快な感情が喚起される。太田（2003）は，ライバルという存在のネガティブな側面として，「ライバルが失敗したときに喜んでしまうこと」や「相手を憎らしいものと考えてしまうこと」，「妬みが生まれること」などを報告し，ライバルという存在が個人の意識や対人認知にネガティブに影響する場合があると述べている。つまり，他者が自分にはない競技者としての強みや高い競技レベルを有している場合にはそれを憎らしいものと感じ，怪我やスランプなどの不幸になればと願望する競技者が存在するということである。

心理学では，このように他者が自分よりも何らかの点で有利な状況を知ることによって生じる不快な感情を妬み感情（envy：以下，妬みと略）と定義されている（澤田，2006）。妬みは他者との社会的比較によっ

Correspondence concerning this article should be sent to: Yuki Ueno, Japan Society for the Promotion of Science (Waseda University) (e-mail: yukitf0111@gmail.com)

¹ 本研究は，日本学術振興会特別研究員（PD）に採択された研究課題「スポーツ集団を通じたスポーツ競技者のレジリエンスの獲得・形成プロセスの解明（課題番号：16J00972）」の一部である。

て生じる感情である一方で (Smith, 2000), 場面に限定されない妬みの感じやすさであるパーソナリティ特性としての妬みについても研究が行われてきた (澤田・新井, 2002)。国内では児童期や青年期を対象とした研究 (e.g., 澤田, 2005) が進められ, 妬みはいじめや悪口など他人を傷つける問題行動に発展することが報告されている。しかし, 優越した他者に対して敵意的な妬みを常に経験するわけではなく, 自分も頑張ればできると思えば称賛や羨望を感じることもあり (井上・村田, 2014), 自身より競技レベルが高い競技者を自らの競技の目標とし, 今後の目標達成や成功の糧に活用できる競技者も同様にいることが考えられる。こうした背景から, 近年では, 妬みのネガティブな側面に加え, ポジティブな側面も注目されている (e.g., Smallets, Streamer, Kondrak, & Seery, 2016)。Lange & Crusius (2015) は, パーソナリティ特性としての妬みには悪性妬み (malicious envy) と良性妬み (benign envy) の2つの下位概念があるとし, それらを測定する Benign and Malicious Envy Scale を作成している。具体的に, 悪性妬みは自分より優れた相手を傷つけたり何かで失敗を望んだりする敵意を中核とする感情であるのに対し, 良性妬みはその相手を自分の成長に繋げるための目標や糧にするための感情とされている (e.g., Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters, 2011)。例えば, 学業場面では, 良性妬みを抱きやすい者は試験に先立ち設定された目標得点を高め, 結果として成績 (試験得点) が向上したことが示されている (澤田・藤井, 2016)。また, Lange & Crusius (2015) は, 良性妬みを抱きやすい者はマラソン競技会に参加する前に目標を高く設定し, 実際の成績 (平均時速) も向上したことを報告している。なお, いずれの研究においても悪性妬みと成績との間で有意な関連は確認されておらず, 悪性妬みにはポジティブな効用がないことが明らかにされている。

ところで, 国内外において, スポーツ競技者を対象とした, 悪性と良性妬みに関する研究はされていない。先行研究 (e.g., 澤田・新井, 2002) から, 比較する他者が心理的に近く, 自分にとって重要な領域であるほど, 妬みが喚起されることが報告されている。心理的に近く同じ目標を持って活動を行っている競技者にとって, チームメイトや同じ競技種目に従事する者に対し, 悪性と良性妬みのいずれか, もしくは両方の妬みを感じていることが予測される (e.g., 雨宮他, 2014; 太田, 2003)。また, 妬みが生じる状況は自分にとって関与度の高い次元で心理的に近い他者が自分より優れたパフォーマンスを示している環境下であるため (坪田, 2011), 他者のパフォーマンスが参照可能であるスポーツにおいて妬みが喚起される場面は複数想定される。澤田・藤井 (2016) によると, 良性妬みを抱きやすい者が競争的な課題とそうでない課題の

いずれにおいてより効果を発揮するのかを明らかにする必要があることを報告しており, 競技者が所属する競技種目 (例えば, 対戦競技と記録競技) の環境が良性妬みに影響する可能性が考えられ, 自身の競技レベルとの組み合わせによって妬みの得点が異なることが推察される。すなわち, 競技種目と競技レベル, 悪性妬み, 良性妬みの関係性を検討することで競技者の妬みに影響する要因を明らかにできると思われる。

以上のことから, 本研究では, スポーツ競技者を対象とした, パーソナリティ特性としての妬みと競技種目, 競技レベルの関連を明らかにすることを目的とする。先述した研究を踏まえ, 対戦競技と記録競技ではチームメイトやライバルとの関わり方や目標が異なり, また競技レベルの高さによって悪性と良性妬みの得点に違いが見られることが考えられる。スポーツ領域の研究では, 競技レベルとの関連を検討するうえで, 競技成績を高レベル群 (全国大会レベル以上), 低レベル群 (全国大会レベル以下) の2群に分類し, 分析に用いている (e.g., Ueno, Shimotsukasa, Suyama, & Oshio, 2017)。競技種目は, 対戦相手との勝敗を競う対戦競技 (オープンスキル) と記録や得点によって勝敗を競う記録競技 (クローズドスキル) 間で試合場面における思考や感情が異なることが報告されている (有富・外山, 2015)。これらの研究から, 競技種目を対戦競技と記録競技, 競技レベルを全国大会レベル以下の低レベル群と, 全国大会レベル以上の高レベル群に分類し, 競技種目と競技レベルの組み合わせが悪性妬み, 良性妬みを説明するか検討する。また, 本研究では, 競技者の妬みに影響する要因を明らかにすることから, パーソナリティ特性が妬みに対し影響する可能性を踏まえ (e.g., Smith, Parrott, Diener, Hoyle, & Kim, 1999), パーソナリティ特性を統制したうえでも競技種目や競技レベルの変数が妬みに関連するか明らかにする必要がある。そのため, Big Five パーソナリティ特性 (以下, Big Five と略) を統制変数として投入し, 従属変数である妬みに対し, 独立変数である競技種目, 競技レベルが説明可能であるか試みる。

方 法

調査時期・対象者

調査時期は2017年1月であり, 調査対象者は首都圏の体育大学に所属する学生496名 (男性428名, 女性68名, 平均年齢20.6歳, $SD=0.6$) であった。対象者の競技種目は, 計38種目であり, その内訳は対戦競技 (計19種目, 331名:e.g., 野球, バスケットボール, サッカー), 記録競技 (計19種目, 165名:e.g., 陸上競技, 競泳, 体操競技) であった。また, 競技レベルの内訳は, 低レベル群 (175名: 全国大会レベル以

Table 1
良性妬みを従属変数とした、階層的重回帰分析の結果

変数	標準偏回帰係数 (β)			Mean	SD
	Step 1	Step 2	Step 3		
Step 1					
年齢	−.02	−.03	−.03	—	
性別	.02	.01	.02	—	
競技経験年数	−.06	−.07	−.07	10.74	3.40
外向性	.08	.08	.08	4.69	1.41
協調性	.02	.02	.02	4.93	1.03
勤勉性	.22***	.22***	.22***	3.70	1.23
神経症傾向	.02	.02	.02	4.14	1.12
開放性	.23***	.23***	.24***	4.42	1.19
Step 2					
競技種目		−.01	−.00	0.33	0.47
競技レベル		.07	.07	0.65	0.48
Step 3					
競技種目×競技レベル			−.09*	—	
	R^2	.15***	.15***	.16***	
	ΔR^2		.01	.01*	

Note. 性別, 競技種目, 競技レベルは0, 1のダミー変数である。

* $p < .05$, *** $p < .001$

下), 高レベル群 (321名: 全国大会レベル以上) であった²。

調査の手続き

本研究では集合調査法による質問紙調査を行った。調査は第2著者が担当する講義にて実施された。具体的な調査の手続きとして, 研究の目的や個人情報の保護など研究の趣旨や守秘義務について説明を行ったうえで回答を依頼した。また, 調査は無記名式で行い, 回答は任意であった。なお, 調査は第2著者の所属機関の倫理委員会の承認を得たうえで実施された。

質問紙の内容

基本的属性 フェイスシートにて, 個人の属性 (性別・年齢), スポーツ関連事項として, 競技種目, 競技経験年数, および最高戦績 (①国際大会・②全国大会・③地方大会・④その他) の回答を求めた。

日本語版 Benign and Malicious Envy Scale スポーツ競技者の妬みを測定するために, Lange & Crusius (2015) が作成した Benign and Malicious Envy Scale を邦訳した澤田・藤井 (2016) の日本語版 Benign and Malicious Envy Scale (以下, 日本語版 BeMaS と略) を用いた。本尺度は, 「悪性妬み (項目例: 羨ましく思える人たちに対して, 私は悪意を

感じる)」と「良性妬み (項目例: 他の人たちの優れた成果に, 私も追いつこうと努力する)」の2下位尺度10項目から構成され, 信頼性と妥当性が確認されている。回答は, 「全くあてはまらない (1点)」から「とてもあてはまる (6点)」の6件法で求め, 得点が高いほど, 競技者の妬みが高いとみなされる。なお, 各下位尺度の Cronbach's α は, 悪性妬みが .82, 良性妬みが .83 であった。

日本語版 Ten Item Personality Inventory スポーツ競技者の Big Five を測定するために, Gosling, Rentfrow, & Swann (2003) が作成した Ten Item Personality Inventory を邦訳した小塩・阿部・カトローニ (2012) の日本語版 Ten Item Personality Inventory を用いた。本尺度は, 「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」の5下位尺度10項目から構成され, 信頼性と妥当性が確認されている。回答は, 「全く違う (1点)」から「強くそう思う (7点)」の7件法で求め, 得点が高いほど, 競技者の各下位概念のパーソナリティ特性が高いとみなされる。なお, 小塩他 (2012) に倣い, 各下位尺度の対応する2項目の Pearson の積率相関係数を算出した結果, $r = -.13 - .53$ ($p < .001$) であった。

結 果

本研究では, 統計学的解析に HAD15.011 (清水, 2016) を使用した。まず, 先述した先行研究を参考に, 競技種目を対戦競技 (e.g., 野球, バスケットボール, サッカー) と記録競技 (e.g., 陸上競技, 競泳,

² 競技種目ごとの対象者の属性の内訳は, 対戦競技・低レベル群 107 名, 対戦競技・高レベル群 224 名, 記録競技・低レベル群 68 名, 記録競技・高レベル群 97 名であった。

体操競技)に分類し、また競技レベルは最高戦績をもとに国際大会・全国大会を高レベル群、地方大会・その他を低レベル群の2群に設定した。次に、日本語版 BeMaS の下位尺度である悪性妬み、良性妬み³を従属変数、Step 1 に統制変数として年齢、性別 (0=男性, 1=女性)、競技経験年数、Big Five、Step 2 に競技種目 (0=対戦競技, 1=記録競技)、競技レベル (0=低レベル群, 1=高レベル群)、Step 3 では競技種目と競技レベルの交互作用項を投入した、階層的重回帰分析を施した。分析の結果、良性妬みにおいて交互作用項を投入した Step 3 の決定係数で有意な増分が示された ($\Delta R^2 = .01, p < .05$)。一方で、悪性妬みでは競技種目や、競技レベル、その交互作用項を投入した Step 2 ($\Delta R^2 = .01, n.s.$) と Step 3 ($\Delta R^2 = .00, n.s.$) の ΔR^2 は有意でなかった。そのため、Step 3 の ΔR^2 が有意であった良性妬みにおいてのみ Table 1 に結果を示した。具体的に、良性妬みに対して競技種目×競技レベルの交互作用項が有意であった ($\beta = -.09, p < .05$)。次に、有意であった交互作用項に対し単純傾斜の検定を施した結果、対戦競技 (競技種目=1SD) において競技レベルは良性妬みに対し有意な正の関連を示したが ($b = 1.56, \beta = .16, p < .01$)、一方で記録競技 (競技種目+1SD) では有意な関連は見られなかった ($b = -.13, \beta = -.01, n.s.$)。なお、多重共線性を示す VIF (variance inflation factor) の値は最終の Step 3 において許容範囲内 (1.02-1.14) であった。

考 察

本研究の結果から、良性妬みに対する対戦競技における競技レベルの直接的影響の方が記録競技よりも大きいことが確認された。有富・外山 (2015) によると、対戦競技では、対戦相手とのコンタクトや時間制限など変化する状況への対応や判断が重要となるため、戦略や作戦といった競技特有の思考や、対戦相手やチームメイト、試合の戦況など、外界への注意や認知が場面の優勢や劣勢に関わらず多く生じると報告されている。すなわち、記録競技と比較して、対戦競技の方が対戦相手やチームメイトなどの他者に対して社会的比較や評価を行う場面が多く、先述した外的な状況判断がパフォーマンスを向上させる要因となっている。しかし、記録競技では外的な状況判断よりも心理面のセルフコントロールがパフォーマンス向上に寄与する (有富・外山, 2015)。そのため、社会的比較を刺激にし、パフォーマンス向上を目指す特性である良性妬みの得点は、記録競技の場合には競技レベルの高低による差は生じなかったのだろう。これらのことから、競技レベルが高い対戦競技者は良性妬みを高

く有していることが示唆された。一方で、悪性妬みでは競技種目や競技レベルからの影響は示されなかった。悪性妬みは優れた他者に対し敵意を中核とする感情であるため (e.g., Van de Ven et al., 2011)、悪性妬みを抱きやすい者はいじめや悪口などの問題行動には繋がるが (e.g., 澤田, 2005)、パフォーマンス (例えば、学業成績やマラソンにおける平均時速) とは無関連であったことが報告されている (Lange & Crusius, 2015; 澤田・藤井, 2016)。そのため、本研究で得られた競技者の悪性妬み、良性妬みに関する知見は先行研究と一致した結果となった。

最後に、本研究の限界と課題を3つ挙げる。1つ目は、同じ部活動やスポーツ団体に所属している競技者を対象に調査したものではないため、妬みが喚起される相手を特定することができなかった。2つ目は、競技種目を対戦競技と記録競技間で比較を行ったが、今後は単一種目やポジション別などの詳細な種目分類から検討することである。3つ目は、本研究のデザインが一時点の横断調査であったことから、因果関係については慎重に解釈する必要がある。また、本研究において特定の Big Five の下位概念と悪性妬み、良性妬みとの間で関連があったことから⁴、妬みと関連があるパーソナリティ特性を統制変数として導入することで、スポーツが妬みに及ぼす独自の影響を示唆できると思われる。今後は、このような課題にもとづき、競技者の妬みに関して調査を行っていくことが期待される。

引用文献

- 雨宮 怜・上野雄己・清水安夫 (2014). 高校運動部員のリアリティショックに関する基礎的研究 体育研究, **47**, 8-13.
- 有富公教・外山美樹 (2015). 日本人アスリートの競技中に生じる思考の構造および発生傾向の検討 スポーツ心理学研究, **42**, 1-14.
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B. Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, **37**, 504-528.
- 井上裕珠・村田光二 (2014). 獲得可能性が妬み感情に及ぼす影響 心理学研究, **85**, 1-8.
- Lange, J., & Crusius, J. (2015). Dispositional envy revisited: Unraveling the motivational dynamics of benign and malicious envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **41**, 284-294.

³ 妬みの得点は、悪性妬みで $M = 2.22$, $SD = 0.89$, 良性妬みで $M = 4.26$, $SD = 0.96$ を示した。

⁴ 階層的重回帰分析の結果から、外向性と協調性が悪性妬みに対し負の関連、神経症傾向が正の関連を示した。また良性妬みに対しては勤勉性と開放性が正の関連を示した。先行研究 (e.g., Smith et al., 1999) では悪性妬みと神経症傾向の間に有意な正の相関が報告されていたが、スポーツ競技者を対象とした場合、神経症傾向以外のパーソナリティとの関連も示唆された。

- 太田伸幸 (2003). ライバルの肯定的側面と否定的側面の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, **50**, 11-18.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, **21**, 40-52.
- 澤田匡人 (2005). 児童・生徒における妬み感情の構造と発達の变化——領域との関連および学年差・性差の検討—— 教育心理学研究, **53**, 185-195.
- 澤田匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処——感情心理学からのアプローチ—— 新曜社
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響 教育心理学研究, **50**, 246-256.
- 澤田匡人・藤井 勉 (2016). 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか? ——良性妬みに着目して—— 心理学研究, **87**, 198-204.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- Smallets, S., Streamer, L., Kondrak, C. L., & Seery, M. D. (2016). Bringing you down versus bringing me up: Discrepant versus congruent high explicit self-esteem differentially predict malicious and benign envy. *Personality and Individual Differences*, **94**, 173-179.
- Smith, R. H. (2000). Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls, & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research* New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers, pp. 173-200.
- Smith, R. H., Parrott, W. G., Diener, E. F., Hoyle, R. H., & Kim, S. H. (1999). Dispositional envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 1007-1020.
- 坪田雄二 (2011). 妬みの生起における予期の役割 対人社会心理学研究, **11**, 101-108.
- Ueno, Y., Shimotsukasa, T., Suyama, S., & Oshio, A. (2017). Correlations between competitive sports' characteristics and the dark triad. *Journal of Physical Education and Sport*, **17**, 533-536.
- Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2011). Why envy outperforms admiration. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **37**, 784-795.

(2017年7月27日受稿, 2017年12月25日受理)